

アンドレス・フェルナンデス＝デ＝アンドラダ
『ファビオへの道徳書簡』
—翻訳と注釈—

中井 博康

Andrés Fernández de Andrada's *Epístola moral a Fabio*:
A Translation with Explanatory Notes.

NAKAI Hiroyasu

Andrés Fernández de Andrada (1575-1648) was a Sevillian poet, whose *Epístola moral a Fabio* [*Moral Epistle to Fabio*] is considered to be the zenith of the Horatian epistle in Spanish literature. In this poem about the transitory nature of all things human, the poet warns his friend Fabio about being over-eager to seek positions in the Court, and encourages him to instead pursue a virtuous life founded on a Stoic resignation. This is a translation with explanatory notes, based on the recently updated critical edition by Dámaso Alonso.

はじめに

スペイン語文学における道徳的な書簡詩は、Alcina & Rico (pp.108-130) および Sánchez Robayna (pp.129-149) によれば、ペトルルカに範を仰いでスペイン語詩にイタリアの詩型を導入したガルシラソ・デ・ラ・ベガ Garcilaso de la Vega (1491/1503-1536) がフアン・ボスカン Juan Boscán (1487-1542) に宛てた『ボスカンへの書簡』 *Epístola a Boscán* (1534) に始まり、ディエゴ・ウルタド＝デ＝メンドサ Diego Hurtado de Mendoza (1503/1504-1575) が、アリオストの『風刺詩』 (1517-1525) に倣った三行詩の形式で、ボスカンとの間で交わした書簡詩によって、その基本的な形式が確立したとされる。その後、エピクテトスをはじめとするストア派思想の翻訳・紹介や、ネオストア主義者ユストゥス・リプシウス Justus Lipsius (1547-1606) の影響などとあいまって、16世紀後半には、フランシスコ・デ・アルダナ Francisco de Aldana (1537-1578) や フランシスコ・パチェコ Francisco Pacheco (1535-1599) といった詩

人たちにより、中庸や友情を説き、都会の喧騒を離れた田園での質素で禁欲的な生活を勧める書簡詩が、数多く書かれることになった。そして、このような道徳的な書簡詩の傑作のひとつとされるのが、アンドレス・フェルナンデス＝デ＝アンドラダ Andrés Fernández de Andrada (1575-1648) の『ファビオへの道徳書簡』 *Epístola moral a Fabio* である。

作者のフェルナンデス＝デ＝アンドラダについては不明な点が多く、セビーリャ出身の軍人で、1596年のイギリスによるカディスでの略奪行為に対する防衛戦に参加、その様子を親族に書簡で報告しており、セビーリャでは文学サークルとも交流があったようだが、1612年頃、コレヒドールとしてヌエバ・エスパニーニャに赴任した友人のアロンソ・テリーヨ＝デ＝グスマン Alonso Tello de Guzmán (1580頃-1623) の後を追うように大西洋を渡り、いくつかの官職についた後、1648年に負債を抱えたまま赤貧のうちに死去した、ということくらいしか分かっていない。そのため、『ファビオへの道徳書簡』についても、ルペルシオ・レオナルド＝デ＝アルヘンソラ Lupercio Leonardo de Argensola (1559-1613) やバルトロメ・レオナルド＝デ＝アルヘンソラ Bartolomé Leonardo de Argensola (1562-1631)、フランシスコ・デ・メドラノ Francisco de Medrano (1570-1607) といった、同時代の他の詩人による作品とみなされることもあった。

『ファビオへの道徳書簡』は、上述の友人アロンソ・テリーヨ＝デ＝グスマンが、まだマドリードの宮廷で出世を望んでいた頃、彼に宛てて（ただし、セビーリャの道徳的な詩の伝統に則り「ファビオ」という文学的な宛名にかえて）1611年前後に書かれたとされる。三行詩67連と四行詩1連の205行からなるテキストは、「ファビオ」への呼び掛けを区切りとして内容的に4つに分けられ、まず第1部 (vv.1-114) では、宮廷で出世を望むことがいかに虚しいかを説いて故郷セビーリャに隠遁することを勧め、第2部 (vv.115-186) では、節度と中庸を重んずるストア主義的な修養の様子を語り、第3部 (vv.187-201) で主張をまとめ、第4部 (vv.202-205) で共に修養生活を実践するよう誘う、という構成になっている。

翻訳にあたっては、フェルナンデス＝デ＝アンドラダ研究の第一人者でありテキストの決定的な校訂を行った Dámaso Alonso による校訂版を底本としたが、註釈については、ホラティウスやセネカからの影響が明らかな表現について該当する箇所を引用して示すにとどめ、複数ある手稿の間の異同や16世紀の他の書簡詩との類似表現といった、底本に付された膨大な文献学的な註については省略した。また、押韻や音節数を反映することは諦めて行数のみ原文に合わせるにとどめ、七五調や擬古的な表現も極力排して、読みやすさを優先した。

翻訳と注釈

『ファビオへの道徳書簡』

- 1 ファビオよ 宮廷で出世を望むのは
 野心家の命をも短くし
 青年の髪をも白くする牢獄¹

- 4 望みをつましくするか捨てられぬ者は
 人士の名に値することはなく
 望む地位を手にもすることもない

- 7 卑屈で低俗な者は
 高望みしながら競々とし
 落伍するより傀儡となることを選ぶ²

1 宮廷蔑視（と田園賛美）という主題は、アントニオ・デ・ゲバラ Antonio de Guevara (1481?-1545) の『宮廷を蔑み田園を称える書』 *Menosprecio de corte y alabanza de aldea* (1539) をはじめとして、スペイン文学にも枚挙にいとまがないが、ストア派のテキストの例としては、「君はもう分かっているね、君はいまの見栄えはいいが、悪しき仕事から抜け出さねばならないことを。[…] 注意して好機を窺いたまえ。見つけたら、つかまえて渾身の力を込め、君の用務から抜け出せるようにしたまえ。[…] 君はいまの生き方から抜け出すか、人生そのものから出て行くかのいずれしかない」（セネカ『倫理書簡集』22・1-4）、「なんと多くの無鉄砲を金銭のために、なんと多くの苦役を栄誉のために君は試みてきたことだろう。隠居暮らしのためにも、思いきってなにかすべきだ。さもなくば、あの面倒ばかりの勅任管理職、それから都の公務をしながら年をとらねばならない」（同書19・8）、「生は、使い方を知れば、長い。しかし、ある者は飽くなき貪欲の虜となり、ある者はあくせく精出すむだな労役に呪縛され、[…] また、常に他人の判断に生殺与奪の権を握られている公職への野心で疲労困憊する者もいれば、[…] 自発的に奉仕しながら、感謝もされない目上への伺候で身をすり減らす者もいる。また、多くの者は他人の幸運へのやっかみか、己の不運への嘆きかで生を終始する」（同『生の短さについて』2・1）などが挙げられる。

2 隷従的な人生については、例えば「君が押し込まれている人生というのは、それ自体では君の不幸と隷従を決して終わらせることのない人生だ。すり減った首を軛から引きはずしたまえ。首はひと思いに斬り落としてもらうほうが、いつまでも押さえつけられているよりましだから」（セネカ『倫理書簡集』19・6）、「どんな臆病でも、ひと思いに落ちることよりいつまでも宙吊りであることを選ぶ人はないのだから」（同書22・3）など。

- 10 これに対して 高邁で剛毅な者は
上長に膝を屈するのではなく
逆境にこそ こうべを垂れる³
- 13 執着して待ち続ける者ではなく
引き下がることを知る賢者にこそ
幸運の女神は 勝利と栄冠を授ける⁴
- 16 恐ろしく 煩わしいことに
私たちが産声をあげた時から
逆境は 虎視淡々と待ち構えている
- 19 だが 逆境など過ぎるに任せようではないか
ひとたび奔流するや 山にまで迫る
滔々たる大河グアダルキビルのように⁵
- 22 英雄の一人に数えられるのは
自らの手で功績を挙げた者であり
地位により名を得た者ではない⁶

3 偉大な人物と逆境については、例えば「あえて言おう。偉大な者はしばしば逆境を喜ぶ。勇敢な戦士が戦を喜ぶのと同じだ。[...] 勇気は危険に食欲である。[...] 不死なる神々が、君たちの精神に対して、いわば鞭をふるうことを決して恐れないように。艱難こそ徳の機会である」(セネカ『摂理について』4・4-6)、「最良の人々が最悪の不幸に遭遇するのを目の当たりにするとき、われわれは各々、自分にはどのような境遇が待ち構えていると思えよう。では、どうすればよいのか。苦難に遭遇したとき、彼ら一人一人がどのような態度を示したかを見てみると良い。そうして、彼らが勇敢であったのなら、みずからの心にも彼らと同じ勇敢な精神が宿るよう願うがよい」(同『心の平静について』16) など。

4 臨機応変な対処については、例えば「良識ある人物はまた、君から見れば行うだろうと判断されることすら行わないだろう。つまり、出世競争に身を絡め取られながら、つねにその荒波に耐えたりはしない。そうではなく、自分を翻弄するものが險しく、不確かで、先の分からぬものだと思えば、歩みを戻すだろう。背中を向けるのではなく、少しづつ安全なところへ退くだろう」(セネカ『倫理書簡集』22・8) など。

5 グアダルキビル Guadalquivir (原文では«Betis») は、スペイン南部を西流するアンダルシア地方最大の河川。

6 偉大な人物の条件については、例えば「成功は民衆や凡才にすら訪れる。だが、死すべき者を襲う危難と恐怖を打ち倒し、敗北の軛の下へ送り込むのは、偉大な男の本分である」(セネカ『摂理について』4・2) など。

- 25 かつて正義の女神が所有していたものは⁷
おそるべき剣と秤で統べていたものは
今や すべて寵臣の私有財産となってしまった
- 28 偏頗な者の金や悪意や暴政が
他に先んじ 公正な者に勝るのならば
美德はいったい何を望み 信ずればよいのか？⁸
- 31 さあこちらに来て 古都ロムレアの⁹
母なる懷で休むがいい 君には
ここの空気の方が 心地よく安らかだろう
- 34 ここなら われらの肉体が大地に戻される時
「やさしく包んでおくれ」と言いながら
土をかけてくれる者もいるだろう
- 37 たとえ珍味佳肴が並べられず
ユノのクジャクが供されなくても¹⁰
空腹のまま食卓を後にすることはないだろう

7 ギリシア神話の正義の女神アストライア（原文では「Astrea」）は、黄金時代に人間を支配していた美德を象徴するとされる。美德と物欲の関係については、例えば「道に落ちている銅銭を／屈んで拾う欲張りが／奴隷よりましで自由だとは／思えませんが、欲張りは／同時に恐れているのです。／びくびく暮らしている者が／自由であるとは思えませんが。／四六時中、蓄財に夢中になって物欲に支配されている者は、武器を失い「徳」という守るべきものを捨て去ります」（ホラティウス『書簡詩』1・169）など。

8 悪徳が美德に先行することについては、例えば「考えてもみたまえ、どれほどたくさんの悪が君のまわりに見えるか。目を向けたまえ。どのような非道にも先例を欠くことのない状況ではないか。自堕落が毎日どれだけ進行していることか。公的な場でも私的な場でも、どれほどの過ちが犯されていることか。[...] 私たちは機先を制せられていて、美德へ向かって急ぐ私たちの左右には悪徳の妨害がある」（セネカ『倫理書簡集』75・15）など。

9 「古都ロムレア」の原文は「la antigua Romúlea」。スペイン南部の都市セビーリャ Sevilla が、ローマ時代に植民市ユリア・ロムラ・ヒスパリス Colonia Iulia Romula Hispalis として建設された史実による。また、第31行から第36行にかけては、例えば「この地や、気持ちのよい丘は君と僕とを招いている。この地で君は友人の詩人の、いまだ温かい灰に涙を流すだろう」（ホラティウス『歌集』2・6）を踏まえた表現とされる。

- 40 闇夜のエーゲ海を行く船乗りが¹¹
灯台の光を求めるように
甘く愛しい安らぎをこそ 求めるべきだ
- 43 きみも欲望を抑制すれば 必ずこう言うだろう
「追い求めてきたものに価値はなかった
俗人の凡慮など戯言に過ぎない」と¹²
- 46 ナイチンゲールも 森の奥深く
羽と藁で作った つましい巢で
嘆くことを むしろ望む
- 49 金の鳥かごに囚われて
やんごとなき王子の耳を
追従で楽しませるくらいならば
- 52 長きにわたり悪徳に支配された都で
寵臣の顔色を占う運命から
逃れられない者ほど 哀れな者はいない
- 55 出世を追い求め 不安になるのはやめよう
きみが供物を捧げている偶像は
金品を受け取っても 願いを叶えることはない

10 贅沢と質素については、例えば「渇きが喉を焼く時に黄金の杯は求めまい。腹を空かしている時は「雉でなければ駄目だ」とか「鳩の肉しか食べぬ」などと偉そうなことはいわないで、何でも食べるに違いない」（ホラティウス『風刺詩』1・2）、「はたして空腹の時に選り好みして何もかもはねつけるかね、孔雀とヒラメだけは別にして」（セネカ『倫理書簡集』119・12）など。

11 「あの広大なエーゲ海の／嵐の虜になった者（商人）は／暗黒の雲が月を隠し、／夜空の星が頼りになる／その輝きを消した時（嵐の際）、／神に「平和」を祈っている」（ホラティウス『歌集』2・16）等を踏まえた表現とされる。

12 物欲への戒めについては、例えば「あらゆるものを軽蔑できる人はいるが、あらゆるものを所有できる人はいない。富に至るいちばんの近道は、富を軽蔑することだ」（セネカ『倫理書簡集』62・3）、「担ぐ荷物を小さくしたまえ。私たちがもっているものに不可欠なものは一つもないのだから。自然の掟に戻ろう。すでに富は用意できたのだから」（同書25・4）など。

- 58 生きている現在のことを考えよう
そうすれば 明日のことはもちろん
次の瞬間を思い煩うこともなくなる¹³
- 61 いったい何を期待しているのだろう
大都イタリカでさえ 影となって消えたのに？¹⁴
まったく人間の過ちは絶えることがない！
- 64 ギリシアの記章も 元老院も
君主制ローマの旗も 潰えてしまった
彼らの時代も終わってしまったのだ
- 67 私たちの人生は はかない¹⁵
太陽が昇ったかと思えば
冷たい闇夜に消えてしまう一日のようだ

-
- 13 現在の重視については、例えば「この「現在」に満足して、「未来」のことは心配せず、つらい事態も、温厚な笑いですます方がいい。万事、うまくは行かぬのだ」（ホラティウス『歌集』2・16）、「恐れは望みのうしろについてくる。[…] 最大の原因は私たちが現在の事態に適切な対応をせずに遠い未来の事態に思考を先走らせることにある。こうして、先見という人間に与えられた最大の恵みが災いへと転じてしまうことになる。野獣は目に見える危険を避け、逃れたなら必ず不安は消える。私たちはというと、来るべきものによっても、過ぎ去ったものによっても責め苛まれる。私たちの恵みの多くが私たち自身に仇をなす。というのも、恐怖の責め苦は、記憶に甦る一方、先見によって予測されるのだから。現在の状況によってのみ不幸な人は一人もいない」（セネカ『倫理書簡集』5・7-9）など。
- 14 イタリカ（原文では Itálica）は、スペイン南部セビーリャ市の北西にあるローマ時代の都市遺跡。大規模な公共建築物を備え、五賢帝のトラヤヌスやハドリアヌスをはじめとする人材を輩出するなど、グアダルキビル川対岸のセビーリャと繁栄を競ったが、5世紀に入ると衰退を迎え、異民族との戦乱を通じて荒廃した。16世紀のセビーリャでは、ロドリゴ・カロ Rodrigo Caro (1573-1647) の『イタリカの遺跡に捧げるカンシオン』*Canción a las ruinas de Itálica* を筆頭に、栄枯盛衰をうたう «ubi sunt»（彼らはどこに？）の主題の格好の材として多くの詩人の詩想をそそった。
- 15 人生の儚さを表す同様の比喩としては、例えば「千年といえども御目には／昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません。／あなたは眠りの中に人を漂わせ／朝が来れば、人は草のように移ろいます。／朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい／夕べにはしおれ、枯れて行きます」（『詩篇』90・4-6）、「人の生涯は草のよう。／野の花のように咲く／風がその上に吹けば、消えうせ／生えていた所を知る者もなくなる」（同 103・15-16）、「肉なる者は皆、草に等しい。／永らえても、すべては野の花のようなもの。／草は枯れ、花はしほむ。／主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい」（『イザヤ書』40・6-7）、など。

70 朝方は青いのに 夕方には枯れてしまう
干し草のようだ まさに酔生夢死！
この夢から目覚めることはできるだろうか？

73 生きるとは生から遠ざかる営みであり
平凡な生も死につけ狙われていると
私にも悟ることができるだろうか？

76 速やかに流れて海に注ぐ川のように¹⁶
最期のひと息に向かって
私もまた流されて行く

79 過去は 私に何を残しただろうか？
何が起ころうかも分からないというのに
未来は 私を幸福にするだろうか？

82 ああ 死に向かっているならば
避けられない最期の時を迎える前に
せめて死に方は身につけておきたい¹⁷

85 非情な死が その冷酷な手で
この無用の穀物を刈り取り
自然に戻す前に！

16 ホルヘ・マンリーケ Jorge Manrique (1440頃-1479) の『父の死に寄せる歌』 *Coplas a la muerte de su padre* の次の一節を踏まえているとされる。「私たちの人生はどれもみな／海へと注ぐ川であり、そこは／死の世界／お歴々はそれをめざして／まっしぐらに突き進み／死に絶える／豊かな水を湛えた大河も／中くらいの川や小川も／流れ込む／どれも行き着いてしまえば／あくせく稼ぐ者も金持ちも／みな同じ」(vv.25-36)。

17 生死については、例えば「私たちは日一日と死んでいる。なぜなら、日一日と寿命の一部を奪い取られており、成長しているときにも寿命は減じているのだから」(セネカ『倫理書簡集』24・20)、「自分が日一日と死につつあることを誰が理解しているか。実際、私たちの勘違いは私たちが死を遠くに見ていることにある」(同1・2)、「死に方を修得することは素晴らしいことだ」(同26・9) など。

- 88 咲き誇る夏も 過ぎ行き
実りの秋も 過ぎ去り
白銀の冬も 消え去った
- 91 深い森の青葉も散ったというのに
私たちは欺瞞の夢に閉じこもったまま
いまだ生きること固執している¹⁸
- 94 主をこそ おそれようではないか
主は 春も秋も 雨を降らせ
私たちに豊かな実りを恵んでくださる¹⁹
- 97 天からの慈雨や耕作を拒み
ぶどうも実を結ぶことのないような
固陋な荒地になるのはよそうではないか
- 100 人間が創られたのは まさか
干戈を交えたり 海を越えるためだと
きみは考えてはいないだろうか？²⁰

-
- 18 生への執着については、例えば「私たちを縛りつけている鎖はただ一つ、人生への愛だけだ。それは打ち捨てておくべきものではないとしても、小さくしなければならない」（セネカ『倫理書簡集』26・10）、「多くの人々は人生にすがりついて離さず、ちょうど濁流にさらわれる人が棘ある草も角の立った岩もつかむようだ」（同書4・5）、「まさに死に直面して、死から逃れようとし、なおも生に執着して未練を残す者たちは、捕まえて（正して）やらねばならない」（同『心の平静について』16・3）など。
- 19 旧約聖書の「我々の主なる神を畏れ敬おう／雨を与える方、時に応じて／秋の雨、春の雨を与え／刈り入れのために／定められた週の祭りを守られる方を」（『エレミヤ書』5・24）、「もしわたしが今日あなたたちに命じる戒めに、あなたたちがひたすら聞き従い、あなたたちの神、主を愛し、心を尽くし、魂を尽くして仕えるならば、わたしは、その季節季節に、あなたたちの土地に、秋の雨と春の雨を降らせる。あなたには穀物、新しいぶどう酒、オリーブ油の収穫がある」（『申命記』11・13-14）などを踏まえているとされる。
- 20 商業・軍事活動については、例えば「空腹と喉の渇きを追い払うには、驕り高ぶった敷居の上にあぐらをかく必要はない。険しい眉根や慇懃無礼な態度にも辛抱することはない。海に乗り出す必要も、軍役に従う必要もない」（セネカ『倫理書簡集』4・10）など。

- 103 地球を測るように周航したり
熱帯を漫遊するためだと？²¹
そう考えているなら きみは間違っている
- 106 私たちに備わっている崇高な知性は
もっと高次の営みのためにあり
もっと高貴な対象のためにある²²
- 109 人間にのみ与えられた
あの神聖で清澄な理性が
その輝く光で 私の目を開き
- 112 この冷たく固く寂しい胸の中に
新たな火を点すと
消えていた炎が再燃し始める

-
- 21 旅については、例えば「どうして、短い人生に多くを求めて、あくせくとわれらは時を過ごすのだ。なぜ、われわれは、温暖な自分の土地を、余所の地と交換しようとするのだろうか」(ホラティウス『歌集』2・16)、「海を越え、町々を渡り歩いても、何の役に立つのか。君を苦しめている状況から逃れたいなら、どこか別の場所に行くのではなく、別人にならなければならない」(セネカ『倫理書簡集』104・8)など。
また、特に富を求めての旅については、例えば「暑さの中の熱帯にも、雪降り積もり、人々を寄せつけずにいる北国にも嵐の海も、物ともせず、商人達は出掛けて行き、貿易の巧い船乗りは「貧しいことは悪なのだ。やりたいことはやってみろ。辛抱するんだ」などと言い、厳しいモラルを遠ざける」(ホラティウス『歌集』3・24)、「商人なら最果てのインドまで身軽に駆けてゆきます。貧乏を脱するためには海を越え、岩山を越え、火をくぐるのです」(同『書簡詩』1・1)、「交易で儲けをと言う希望を抱いて闇雲な利欲に導かれ、ありとあらゆる土地をめぐり、ありとあらゆる海を渡る者もいる」(セネカ『生の短さについて』2・1)など。
- 22 人間の魂および理性については、例えば「傑出した魂、自制が利き、あらゆるものを凌駕して乗り越え、私たちに恐怖や願望を抱かせるいかなるものをも笑う魂、それは天上の力に動かされている。[...] 褒めるなら、その人の中にあって奪い取ることも与えることもできないもの、その人に固有のものを褒めたまえ。それは何か、と尋ねるのかね。魂と魂の中で完成された理性だ。実際、人間とは理性をそなえた動物なのだから。だから、人間の善がきわめられるのは、人が生来の目標を成就したときだ。では、理性が人間に要求するものとは何だろうか。これほど簡単なものはない。自身の自然本性に即して生きることだ」(セネカ『倫理書簡集』41)など。

- 115 ファビオよ 私は功も名も求めずに
私を呼んでくださる方に従って
濁世を静かにやり過ごしたい
- 118 驕慢なオリエントの暴君が
100コードの高さの塔を
まばゆい白銀で満たしたところで
- 121 悪徳をすべて買い上げることはできないが
しかし 美徳の獲得には金銭は要らず
誰にでも求めることができる
- 124 だから 黄金や白銀を求めて
東西南北 いくつもの海を渡り
放浪することほど 哀れなものはない
- 127 私には 氏神に囲まれた一隅があれば
本が一冊 友人が一人いれば²³
安眠さえできれば それでいい

23 読書については、例えば「そちらでは十分な本が手に入らないと君は嘆いている。だが、問題は数の多さではなく質のよさだ。これと決めて読むのは役に立つが、あれこれいろいろと読むのは楽しみだけで終わる。定めた目的地に行き着きたい人は、ただ一つの道を辿るのがよい。多くの道をさすらうべきではない。それは進んでいるのではなく、迷っているのだから」(セネカ『倫理書簡集』45・1)、「持ち主が表題だけでも一生かかっても読みきれない万卷の書物や文庫に何の意味があろう。汗牛充棟の書は、学ぶ者の重荷になりこそすれ、教えにはならない。多数の著作家の間をあてもなく渡り歩くよりは、少数の著作家に身を委ねるほうがはるかにましなのである」(同『心の平静について』9・4)、「今の僕に与えられているものだけで充分です。少なくとも構いません。それが神々のみ旨なら、残る私の生涯を自分のために送らせてくださいますよう。一年の間に私が読む本と食糧が沢山ありますよう。当てにならない時々の望みを抱いてふらふらと動揺することのないようお願い申し上げます」(ホラティウス『書簡詩』1・18, 109-110) など。

また、友情については、例えば「私たちに友情があれば、あらゆるものを共有できる。順境も逆境も、それぞれ別にあるのではない。人生を分かち合っているのだから。また、幸福に暮らすことは、自分だけを見守る人、すべてを自分の利益に振り向ける人にはできない。君が自分自身のために生きることを望むなら、もう一人の人間のために生きるべきだ」(セネカ『倫理書簡集』48) など。

- 130 世を離れ 質素に生きる者が
自然に求めるのは わずかこれだけ²⁴
あとはありふれた素朴な食事があればいい
- 133 私がこんな手紙を書き送るからといって
実践できているとは思わないで欲しい
エピクテトスにも難しかったのだから²⁵
- 136 まずは悪徳を憎み 謙虚に努めるよう
心に命ずるだけでいい それでも
天に近づいていくことになるだろう
- 139 もちろん 快楽を忌むだけでは完徳にはならない
なぜなら 悪徳に染まった者ですら
快楽を疎ましく感じることもあるのだから
- 142 とはいえ きみも否定できないだろう
平穏と安息が座し住まう 天の高みに至るには
この道を辿って行くしかないことを²⁶
- 145 主は あらゆるものの時間を
その役割に応じて配分しており
果実をすぐに完熟させることはない

24 自然にしたがった質素な生き方については、例えば「自然が必要とするものは、すぐに手に入るように目の前に置かれている。余計なものを求めて人は苦勞の汗を流す。[...] 十分なだけのものは手許にある。貧乏とうまく付き合う人こそ富める者だ」(セネカ『倫理書簡集』4・11)、「言ってあげたまえ、自然は何を必要不可欠のものとし、何を余分なものとし、どれほど簡単な掟を定め置いたか、また、その掟に従う人にとって、人生はどれほど楽しく、どれほど快適であるか、自然よりも世評に大きな信頼を寄せる人々にとって、人生はどれほどつらく、面倒が多いかを」(同48・9) など。

25 エピクテトス Epiktetos (55頃-135頃) は、古代ローマのストア派の哲学者。

- 148 まず 美しい無垢の花を咲かせ
次に 苦くて不味い実を結ばせ
最後に 甘く美味しく熟らせている
- 151 同様に われわれ人間の知性もまた
人生において いつ 何を
どのように実行するのか 吟味すべきだろう
- 154 やつれた顔で路上に暮らし
美德を見せびらかすような真似を
神がお許しになりませぬよう²⁷

26 修養については、例えば「ルーキーリウスよ、私の理解では、私はいま自分の過ちを正しているばかりか、面目を一新してもいる。ただ、確言もしないし、期待もしていない、あらためるべきは一つ残らずあらためたなどとは。もちろん、引き締めねばならないものの、削ぎ落とさねばならないもの、高められねばならないものがたくさんないはずがない。ただ、魂がよりよい状態へ変わったことを示す証拠はある。それは他でもない、これまで気づかずにいた自分の欠点が見えることだ」(セネカ『倫理書簡集』6・1)、「不変の善きものがないか、まわりを見渡せ。だが、そんなものは何一つない。あるとすれば、魂が自分で自分の中に見つけ出すものだけだ。唯一、美德だけが不朽にして憂いのない喜びを実現する」(同書 27・3)、「さあ、はじめなさい。君もまた／賢者の一人におなりなさい。／まともに生きるその時を／先に延ばしている人は、／川の流れが尽きるのを／じっと見ている農夫です。[…] 軽蔑しなさい、快楽を。／苦痛を伴う快楽は／有害なのです。欲張りは／年中足りぬといいますが、／欲にははっきり限界を／設けなくてはなりません。[…] 心を抑えられるがいい。／抑えられぬという場合も、／無理にも抑えるべきでしょう。／心の手綱を引き締めて／鎖に繋いでおくべきです」(ホラティウス『書簡詩』1・2) など。

27 偽善については、例えば「向上することではなく注目されることを望む連中のやり方に倣って、君の身なりや生き方で目立つようなことはしないことだ。ぼろぼろの服、ぼさぼさの頭、ぼうぼうの髭、銀器に対する嫌悪の宣言、地面を寝床にすること、その他、倒錯した方途で自分をひけらかそうとするいかなることも避けたまえ。[…] 内面はすべてが異なるとしても、外面は私たちも世の人々に合わせねばならない。トガを光り輝かせることはないが、泥まみれにしてもいけない。[…] 私たちがなすべきは、大衆よりも立派な人生を追求することであって、大衆と対蹠的な人生を追求することではない」(セネカ『倫理書簡集』5・2-3)、「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている」(『マタイによる福音書』23・27-28) など。

- 157 このような不快きわまる役者は
世評ばかりを気にかけて
その実 腹の黒い惨めな墓標でしかない
- 160 山中を吹き渡る時には
いかにも静かな そよ風も
葦原では ざわざわとやかましい
- 163 美德も 賢明な者においては寡黙だが
軽薄な見栄っ張りにおいては
いかにもしつこく 騒々しい
- 166 弊衣を自慢することなどせず
身に着けるものは 世の人に倣い
賢者には その生き方を学ぶべきだ
- 169 ドーリスの歌手のように装ったり
金や様々な色に輝くものを
身に着けるのはよそうではないか
- 172 私は 中庸の人生を送りたい²⁸
誰にも気づかれず 振り向かれもせず
平凡でつましい暮らしがしたい
- 175 庶民が使う無骨な陶器を
あたかも高価な蛍石の杯のように
見事に用いる者もいれば

28 中庸については、例えば「黄金の中庸を好む者は／用心深く、手入れなど／しない家屋は避けながら、／羨まれるような邸宅も／用心深く避けている」（ホラティウス『歌集』2・10）など。

- 178 きらめく透明なガラスの杯を
あたかも陶器の湯飲みのように用いる
富貴で鷹揚な者もいた²⁹
- 181 きみもよく知っているはずだ
節度がなければ完璧もないことを
さあ死よ 矢のように静かに迎えに来るがいい！³⁰
- 184 わが胸は二重の鉄板で閉ざされた扉ではない
燃え盛る雷電のように
雷鳴を轟かせながら 攻め来る必要はない
- 187 ファビオ 真の生き方とは
どのようなものか 私には明らかだ
私は心を整え 真の生き方に努めよう
- 190 信念が堅いといって 笑わないでおくれ
熱心に話すからといって
修辭を弄していると思わないでおくれ³¹

29 哲学と道具の関係については、例えば「私たちが一般大衆と異なることを知らしめるには、もっと間近に検分させればよい。私たちの家へ入った者は、家具よりもむしろ私たち自身に感嘆するだろう。大人物というものは陶器でもそれが銀器であるかのように用いるし、銀器も陶器であるかのように用いる人物もそれに劣らない」（セネカ『倫理書簡集』5・6）など。

30 不意に襲いくる死の比喩としての弓矢は、例えば「私は死。儚い現世に生きる人々や／生まれてくる人々に満遍なく関わる者。／おお人間よ、なぜ一瞬のうちに過ぎ去る／短い人生にそれほどまでに拘泥するのか？／実際、私の放つ弓矢を逃れられる／剛力無双の巨人などいないというのに。／冷酷な矢が放たれ肉体を貫通すれば／死は有無を言わず確実となるのだ」（作者不詳『死の舞踏』vv.1-8）、「数多の軍勢とともに／風になびく軍旗、紋章を／掲げた旗／あちこちの難攻不落の城／堅い守りの城壁や要塞／それに防壁／天板をかぶせた深い塹壕も／敵弾を避けるどの守りも／役には立つまい！／〈死〉が凄まじい形相で迫れば／その矢はいかなる障壁も／的確に射貫く」（ホルヘ・マンリーケ『父の死に寄せる詩』vv.277-288）など。なお「わが胸は二重の鉄板で閉ざされた扉ではない」というのは、死を受け入れているという意味。

- 193 真の生き方が 悪徳に勝るところなく
劣っているなどということがあるだろうか？
弱く頼りないなどといって 非難しないでくれ
- 196 強欲ゆえに 海に身を投じ
憤怒ゆえに 剣を手に取り
野心ゆえに 死を笑うというのならば³²
- 199 より崇高な目的を目指すがゆえに
正反対の行動をとることもまた
勇敢な生き方ではないだろうか？
- 202 優しき友よ 無邪気にも所望したすべてのものに
別れを告げて隠遁するつもりだ もう未練はない
この鼓動が時を刻んでいる間に 来てくれたなら
きみにも分かるだろう 私が目指す理念の高さが³³

-
- 31 哲学と言葉の関係については、例えば「演説の訓練をし、まわりにいる人々の賛同を勝ち取ろうとする人々の目的と、若者やぶらぶらしている人々の耳をさまざまに練り出される議論で引きとめようとする人々の目的とは異なる。哲学が教えるのは行為であって言辞ではなく、求めるのは、各人が自身の掟に即して生きること、言動にも背かず、自己矛盾もない生き方をすること、すべての行動に一貫した様式があることだ」（セネカ『倫理書簡集』20・2）、「だから、こうしておくのがよい。そのように力を込めてまくしたてる饒舌が似合うのは、大道商売をする人間であって、重要な問題を真剣に議論し、教示する人間ではない、と。だが、その言葉が切れ切れにこぼれるのも、突っ走るのと同様に私は望まない。耳を伸びきらせるのも、聾するのもしけない。[...] それでも、どちらが容易に理解されるかといえば、飛ぶように過ぎ去る言葉より待ち受けられていた言葉だ。[...] さらに加えれば、真理を語ろうと努める言葉は、飾らず平明でなければならない」（同書 40・3）など。
- 32 無謀な行動については、例えば「君は言うだろう、「難しいのですよ、命を軽んじられるところまで魂を導くことは」と。しかし、見たまえ。なんとつまらぬ理由から命が軽んじられていることか。[...] どうだろう、勇氣によって成就されることが過度の恐怖によっても成就されているとは思わないかね」（セネカ『倫理書簡集』4・4）など。
- 33 修養のための共同生活については、例えば「人からの話よりも当事者の肉声を聞き、生活をともにするほうが、君にとってずっと有益だろう。君は現場へ行くべきだ。その第一の理由は、人間は耳よりも目のほうに大きな信頼を寄せるからであり、第二の理由は、教説を辿る道のりは長いが、実例を経る道のりは短く効果的だからだ。[...] また、私が君を招くのは、君が修養するためだけではなく、君から修養させてもらうためでもある。私たちは互いのあいだでもっとも多く裨益し合うだろうから」（セネカ『倫理書簡集』6・5-6）など。

主要参考文献

- FERNÁNDEZ DE ANDRADA, Andrés, *Epístola moral a Fabio y otros escritos*, edición, estudio y notas de Dámaso Alonso; con un estudio de Juan F. Alcina y Francisco Rico; y bibliografía comentada por Ignacio García Aguilar y Xavier Tubau, Real Academia Española, 2014.
- SÁNCHEZ ROBAYNA, Andrés, «La epístola moral en el Siglo de Oro», *La epístola*, edición dirigida por Begoña López Bueno, Universidad de Sevilla, 2000, pp.129-149.
- セネカ『セネカ哲学全集 1』兼利琢也・大西英文訳 岩波書店 2005年.
- セネカ『セネカ哲学全集 5』高橋宏幸訳 岩波書店 2005年.
- セネカ『セネカ哲学全集 6』大芝芳弘訳 岩波書店 2006年.
- ホラティウス『ホラティウス全集』鈴木一郎訳 玉川大学出版部 2001年.
- ホルヘ・マンリーケ『父の死に寄せる詩』佐竹謙一訳 岩波書店 2011年.
- 『聖書』新共同訳 日本聖書協会 1993年.
- 『ラールス ギリシア・ローマ神話大辞典』金光仁三郎ほか訳 大修館書店 2020年.

